

乾燥地農業にビジネスで挑む！

スーダンの夏は猛烈だ。冬が明ける 3 月頃から徐々に気温が上がり、4 月以降は、日中 40 度を超える日々が数カ月にわたって続く。また国の中部から北部にかけては、年間降水量が 200mm 以下の乾燥地帯が広がる。

2022 年 12 月 4 日から 12 日まで、このスーダンを訪問した。訪問の目的は、日本の中小企業のもつ節水農業技術の現地適応可能性を探るためである。本調査は、経済産業省の事業を活用して（株）鳥取再資源化研究所が実施するものであるが、国際耕種は業務調整としてこれに参加した。昨年 10 月に耕種へ入社したばかりの私にとって初めての海外出張案件となったが、実はスーダンには JICA 企画調査員として、2019 年 4 月から 2022 年 4 月まで 3 年間滞在していた。そのご縁が繋がり、今回は（株）鳥取再資源化研究所とともに、ビジネスの側面からスーダン農業に関わるという貴重な機会を得ることができた。

さて乾燥地のスーダン農業は、大きく灌漑農業と天水農業の 2 つに分けられる。灌漑農業は主にナイル川沿に拡がり、小麦、綿花、園芸作物や果樹などが栽培されている。灌漑農業は耕作地の 1 割程度であるが、農業生産額は全体の 5 割を占めており、経済開発上重要な地域である。その一方で、1925 年に建設された当時世界最大規模の国营ゲジラスキーム（88 万 ha）をはじめとする多くの灌漑地区において、揚水ポンプや水門等の灌漑施設の老朽化と、用水路のメンテナンス不足に起因する農業用水の不足が問題となっており、これらの地域では水利用の制約に伴う節水技術への一定程度のニーズがある。さらに今回の調査では、灌漑施設の稼働において、昨今の政府による大幅なエネルギー（電力、石油）への補助金削減の影響がみられることが分かった。民営の灌漑施設を

中心に、施設稼働に係るエネルギーコストを下げるため、より効率的な水資源利用の必要性が増してきていることが確認できた。

他方ナイル川から離れた地域では、天水農業が行われている。天水農業は、灌漑農業と比べると生産性は格段に低いもの

の、ソルガムやミレットなどの主要穀物が大面積で生産されており、食料安全保障上重要な地域である。また降雨により生産性が大きく影響されるため、今後気候変動の影響を最も受けやすい地域でもある。このような地域では、限られた水を有効活用する節水農業技術へのニーズが非常に高い一方で、脆弱な農家が多いことから、ビジネスとしての市場性確保が難しい。そこで、機械化天水地域で生産活動を行う民間企業へのアプローチ、あるいは政府や国際機関による開発事業との連携、また企業の CSR 活動など、まずは多様な手段を検討しながら技術を導入し、中長期的な視点でマーケットを育てていくことが必要であろう。

2019 年 4 月の政変に端を発し、未だ情勢が不安定なスーダン。2021 年 10 月の騒擾事案以降は、多くの開発援助がストップし、政府機能もままならぬ状況である。このような中、今回の調査では現地の農業系民間企業と協議する機会が多くあった。そこでは、民間企業が国の抱える諸々の課題に対峙し、ビジネスを推進しつつけるそのたゆまぬ努力と挑戦を目の当たりにした。そしてその姿に、この国の底力と可能性を感じた。

（2023 年 1 月 長野）



ナイル川から灌漑用水をポンプで取水する様子